

【研究論文】

## 琉球諸島における「シマクサラシ儀礼」の期日に関する研究 —事例群の分析と先行研究との比較検証を中心に—

### Study on the Date of “Shimakusarashi Ritual” in the Ryukyu Islands Focus on Analysis of Cases and Comparative Verification with Previous Researches

宮 平 盛 晃  
Moriaki MIYAHIRA

#### 要 旨

本稿は、琉球諸島に広く分布する、《シマクサラシ儀礼》の期日に焦点をあて、その実態の解明を目指し、2002～13年までの悉皆調査により確認できた事例群を、実施月、年間実施回数、複数年周期、臨時事例という項目ごとに分析を行ったものである。そして、その結果を踏まえ、先行研究との比較や検証を試みた。

分析の結果、実施月、年間実施回数、複数年周期、臨時事例の各項目で豊富なバリエーションと大きな地域性があることが分かった。とくに実施月の分析によって、先行研究における主に2月、あるいは8月、12月に多いという説明は、琉球諸島全域でなく、沖縄本島中南部の特徴の一部を捉えたものであることが明らかになった。本儀礼の実施月を言及する際には、具体的な地域性を示す必要がある。

臨時事例の分析では、沖縄本島の周辺離島に顕著であることが分かった。小野重朗は、臨時の防災儀礼が全国の中でも本州ではなく、奄美や沖縄にみられるのは、定期より古い形として周縁に残った結果であるとした [小野 1979:23]。その縮図のような分布形態が、シマクサラシ儀礼の臨時事例においてもみられることが明らかになった。

#### はじめに

日本各地には、疫病や災厄が村に入るのを防ぐための「道切り」という共同祈願がある。それは、定期のと、疫病が発生した場合に臨時に行うものがあり、村の入口や辻に注連縄を張り、神札や草鞋、農具模型などがかけられる。そこには、災厄が村の入口を通過して侵入してくるという意識が見られ、そのために当所に防除の呪具を設けると考えられる [八木 1999:610-611]。

琉球諸島にも、本土の道切りに対応する「シマクサラシ」と呼ばれる儀礼がある。流行病などの災厄の防除のために、動物の骨肉が村の入口に設置される。災厄を村入口で防ぐという点で、本土の道切りと類似するが、動物を要する点が異なる。

近年、民俗学では道切り儀礼などの研究が多く展開されている。しかし、沖縄のシマクサラシ儀礼を扱った論考は限られている。

これまでの調査で、シマクサラシが琉球諸島全域に高い密度で分布していることや、儀礼名称や屠られる動物などに、大きな地域性と豊かなバリエーションがみられることが分かってきた [宮平 2012a, 2012b]。例えば儀礼名称には、シマクサラシ、シマクサラサー、シマクサラーの他に、カンカーやシマカンカーがあり、それ以外にも様々な名称が確認できた [宮平 2013]。

地域性とバリエーションが豊かな事例群にはいくつかの共通点がある。それは、村落への災厄の侵入防止を目的としている点、そのために村落の出入口といわれる要所で動物の骨肉や血を使った防除方法がみられる点、動物が使われる点である。以上からシマクサラシは、防除・動物・境界という要素を持つ儀礼と言える。こうした類似の内容、すなわち主にシマクサラシやカンカーと呼ばれ、災厄の防除のために動物を要し、村落の境界を意識する村落レベルの儀礼を「シマクサラシ儀礼」として扱う。

本稿の目的は、シマクサラシ儀礼の期日の実態を明らかにすることである。以前、儀礼の期日について、2002～9年までのフィールドワークと文献調査による悉皆調査の結果を発表したことがある [宮平 2012a]。本稿では、2010～13年までの悉皆調査により判明した事例を追加し、前稿では扱えなかった先行研究との比較、年間実施回数の間隔、臨時事例の分布形態の特徴、複数年周期の事例などについて、図表を用いた整理分析を行い、儀礼の期日の実態と地域性の解明を目指す。このことは、シマクサラシ儀礼を扱った研究が非常に限られ、研究者や資料によって言及される期日の様態が異なり、その実態が決して明らかにされてないことから意義あるものと考えられる。

まず、シマクサラシ儀礼の期日に関する先行研究や資料を整理し、調査により確認できた事例群を実施月<sup>1</sup>、年間実施回数、複数年周期、臨時事例という項目ごとに分析した上で、その結果と先行研究との比較検証を行う。

## 1 先行研究

シマクサラシ儀礼の実施月のバリエーションや臨時の事例があることを初めて言及したのが、田代安定である [田代 1945:45-46]。田代は蕘算の研究の中で、蕘縄が用いられる儀礼としてシマクサラシを取り上げている。明治中頃の実地調査に基づき、儀礼の実施月は村落によって異なり、2月、11月、12月などや、流行病の際は臨時に行われることがあるとした。期日の特徴を述べた初見の資料であるが、村落ごとのバリエーションや、臨時事例の存在などを把握している。同じような報告は、田代の調査から約90年後の昭和40年代以降にしかみられない点からも貴重な報告と言える [リーブラ 1974:198-199]。

山下欣一は、儀礼の実態を把握するため、計21例のシマクサラシ儀礼を地域や村落ごとに、名称、期日、使われる動物などを表に整理した [山下 1969:70]。2, 3, 8, 9, 11, 12月という様々な期日

1 本稿で扱う期日はすべて旧暦である。

の事例を扱っているが、本文では2月、10月と要約し、そのバリエーションや地域性については言及していない。

シマクサラシ儀礼を含めた全国の防災儀礼の期日に焦点を当てたのが小野重朗である〔小野 1979〕。小野は、名称、期日、儀礼の日に意識される来訪神、災厄を防ぐ方法、農耕の行事との関わりという項目毎に分析を行った。各構成要素の分析と考察は、シマクサラシ儀礼を研究する上で非常に重要なものである。要約すると、沖縄の防災儀礼は、単純で具体的な名称で（儀礼名称）、農耕儀礼の要素がみられず（目的）、流行病という具体的な災厄を意識し（意識される災厄）、餅ではなく肉を吊す（防災方法、吊されるもの）という特徴を持ち、それは防災儀礼の古い形と考えられるとした。

小野はまた期日の分析において、65例のシマクサラシ儀礼の実施月を月別に整理し、表1を作成した。儀礼が年中ほとんどの月に行われているとした上で、「2月、10月、12月が特に多い。6月、8月も前後の月に比べては明らかに多い。つまり、4月を除けば2月から12月まで偶数の月が皆多くなっている」とした〔小野 1979:15〕。

表1 シマクサラシ儀礼の実施月表〔小野 1979:15〕

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
事例数	2	12	3	0	0	3	0	9	7	13	4	12

偶数月に多い理由を、奄美の防災儀礼から考察している。奄美大島の「カネサル」は10月頃の庚申の日に行うが、瀬戸内町西古見では、10月に限らず、年に6度ある庚申の日には山の神やケンムンの活動する日だから山に行ってはいけないという。そこから、古くは年6回（60日ごと）の庚申の日に行われていたものが、10月頃の庚申だけに略化して、現在のカネサルになったと推測した〔小野 1979:16〕。そして、沖縄のシマクサラシ儀礼も奄美のカネサルと同じように、60日ごとであったものが年間実施回数が減少し、偶数月の2カ月毎となり、さらに4月や6月などの農作業の多忙な月が略されて、現在の期日が成立したと考えた〔小野 1979:16〕。

また、全国の防災儀礼は臨時に行われるものと定期的に行われるものがあり、臨時のものは沖縄、奄美、南九州に多く、本州にはみられないという。その分布形態は、古い形は周縁に残るという民俗圏論の視点から、定期より臨時の防災儀礼が古いことを示しているとした〔小野 1979:23〕。熊本県の天草下島の防災儀礼である「コト」を例に、臨時が多いなか、村落によっては定期的に行われるのは、本来は臨時であったコトが定期化する傾向を意味しているとした。村落によって臨時、あるいは定期のコトが行われる状態を経て、臨時のコトは消失し、定期化したものだけが残ったのが東日本のコト八日であると考察している〔小野 1979:4-5〕。シマクサラシを含めた防災儀礼は、定期より臨時の方が古く、定期化していったと考え、防災儀礼の臨時からの定期化説を提示した。

小野はさらに、臨時の防災儀礼に意識される災厄神は病気や火災などの具体的なものであるが、定期化すると、抽象的な災厄神が加わるとしている。例として、難破や鯨による海難者の死霊を意識す

る、沖縄本島の北中城村熱田の定期的なシマクサラシ儀礼を挙げている [小野 1979:24-25]。つまり、臨時な防災儀礼に意識される災厄は、抽象的ではなく、疫病といった具体的な災厄とした。

小野重朗が行ったような、シマクサラシ儀礼の期日に焦点を当てた研究は皆無で、儀礼の期日は沖縄の年中行事のひとつとして概説されることが多かった。

島袋全發は、「部落によっては、2月と今月（10月）と島クサラシとしてまきの周辺にメ縄を張り巡らし、それに獣血を塗り、獣骨やとべらの枝などをぶらさげたところがあった」とし、村落ごとの実施月と年間実施回数のバリエーションを指摘した [島袋 1941:207]。『日本民俗学大系』には、シマクサラシ儀礼は沖縄本島では主に2月頃に行われるほか、10月頃のところもあり、先島諸島はひと月早いとされる [比嘉 1959:130]。『沖縄文化史辞典』には「旧2月に行われる部落単位の行事」 [真栄田編 1972:178-179]、『沖縄大百科事典』には「主に旧暦2月に行われているが、年2回または3回おこなうところもある」とされる [宮平 1983:327]。

以上の文献では、儀礼は主に旧暦2月に行われるが、それ以外の月もあり、村落によって年に1回または複数回行われるとされている。昭和30～40年代以降、最近に至るまでシマクサラシ儀礼の期日のバリエーションを報告したものはあるが、その地域性は触れられてこなかった [リーブラ 1974:198-199；大城 2003:1044-1047]。

## 2 期日

### (1) 実施月

シマクサラシ儀礼を確認できた522村落中、実施月を確認できた478村落（文献117・聞き取り361）<sup>2</sup>を月別に整理したのが表2である。本稿では、期日の地域的特徴を明らかにするため、琉球諸島を大きく沖縄本島北部、中部、南部、その周辺離島、宮古諸島、八重山諸島の6つに分けて事例群を整理する。地域によって事例数の差が数倍以上あるため、地域別に割合を把握することが必要と考え、表2

表2 シマクサラシ儀礼の実施月（月別）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
沖縄本島北部	0 (0)	5 (5)	12 (11)	2 (2)	7 (6)	1 (1)	0 (0)	12 (11)	8 (7)	6 (6)	19 (17)	37 (33)
沖縄本島中部	0 (0)	53 (30)	6 (3)	10 (6)	1 (1)	2 (1)	0 (0)	54 (30)	3 (2)	13 (7)	7 (4)	32 (18)
沖縄本島南部	0 (0)	29 (25)	11 (10)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	32 (29)	7 (6)	16 (14)	5 (4)	10 (9)
周辺離島 (沖縄諸島)	1 (11)	0 (0)	2 (22)	1 (11)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (22)	0 (0)	1 (11)	2 (22)
宮古諸島	4 (4)	8 (8)	6 (6)	1 (1)	7 (7)	43 (45)	3 (3)	6 (6)	3 (3)	3 (3)	3 (3)	8 (8)
八重山諸島	0 (0)	5 (19)	0 (0)	1 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (8)	15 (58)	2 (8)	1 (4)
合計	5 (1)	100 (19)	37 (7)	17 (3)	15 (3)	48 (9)	3 (1)	104 (20)	25 (5)	53 (10)	37 (7)	90 (17)

凡例：各地の括弧は当域全体の百分率（％）、合計の括弧は総数の百分率（％）となっている。  
百分率の合計が102となるのは、小数点以下を四捨五入したためである。

2 478例の内訳は、文献のみで確認できているもの117例、聞き取り調査によって確認できたもの361例である。以下、前者を文献、後者を聞き取りと表記した。以降、具体的な事例には、その出典となる文献を明記し、聞き取り調査によるデータには〔聞〕と付し、調査年や話者に関する情報を末尾に記した。

では当域全体を占める割合を括弧で示した。合計の括弧は総数を占める割合となっている。あと、表2の総数が478村落より多いのは、年に複数回、儀礼を行う村落があるためである。

表2の合計をみると、月によって数の多少はあるものの、全ての月に事例がみられることが分かる。沖縄においてこれほど実施月にバリエーションのある、村落レベルの年中行事は類を見ないと思われる。

具体的な特徴をみていきたい。実施月で最多なのは8月（104例）である。ただ、全体を占める割合は約20％に留まり、2月（100例・約19％）と12月（90例・約17％）も多い。さらに、他の月にも儀礼がみられ、2、8、12月以外の月の事例数は全体の約半数にのぼる。

地域的特徴を明確にするため、表2をグラフ化したのが図1である。地域差が分かるよう、最多の実施月を最大値に設定した。地域ごとに特徴が異なることが分かる。

沖縄本島の特徴は、儀礼の集中する月をみるとわかりやすい。まず、中部と南部は2月と8月に事例が多い。両月が全体を占める割合は中部では約60％（107例）、南部では約54％（61例）と過半数を占めるのに対し、北部では約16％（17例）と低い。北部でもっとも多いのが12月（37例・約33％）である。12月の事例は中部（32例・約18％）、南部（10例・約9％）と南に行くにつれ、少なくなっていく。

周辺離島（沖縄本島）は、他地域に比して事例数が9例と少ないため、これまでのように当域全体としてではなく、村落別に分析する必要があると考え、表3を作成した。

表3をみると、実施月が分散しているよう

凡例：表2の各地の差が明らかになるよう、最多の実施月を最大値に設定し作成した。

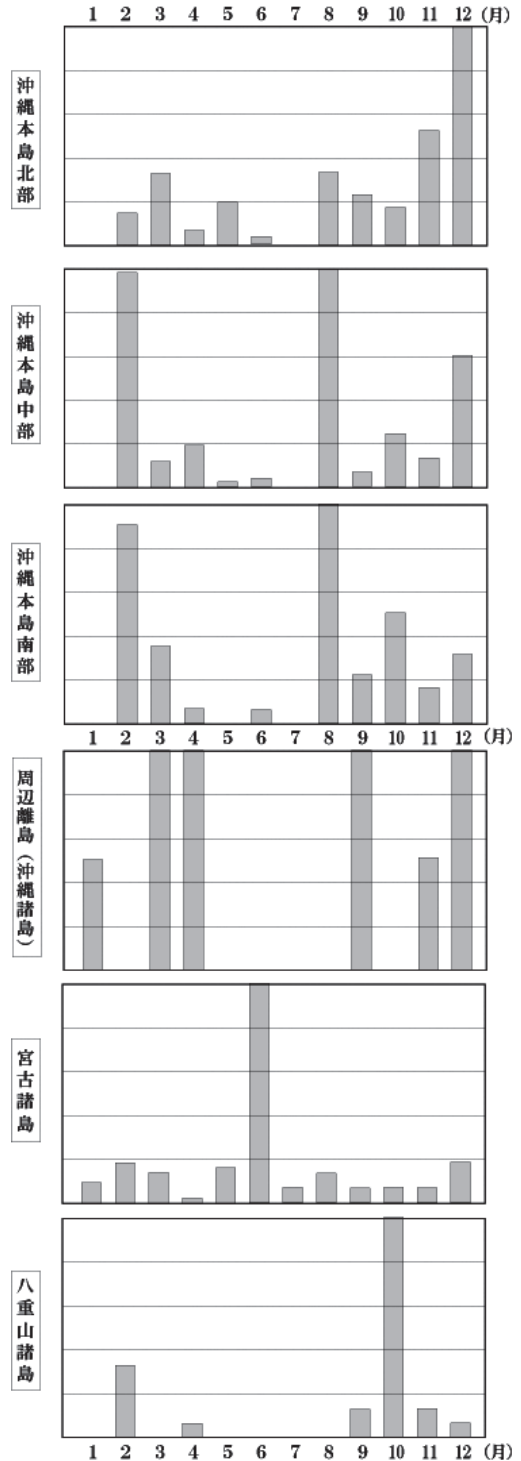


図1 実施月対比グラフ（月別）

に見えるが、渡嘉敷島、座間味島、粟国島のように、同じ島が同じ月になっている。あと、12月（粟国村）を除き、1, 3, 4, 9, 11月など、他地域に例の少ない月に儀礼がみられる。これが何に起因するものなのか、現時点では不明である。距離の離れた島々の期日を、周辺離島の特徴として一様に扱うのではなく、それぞれの島・村落ごとに、その歴史や行政区分など、多角的に分析していく必要がある。

次に、宮古諸島で事例が多いのは6月で、当域全体の約半数（約45%）を占めている。6月の総計の約9割（48例中43例）が宮古の例で、宮古以外にほぼみられない実施月である。6月への集中度が高いが、各月に事例が散見され、琉球諸島で唯一、年間のすべての月に儀礼がみられる地域となっている。他地域では皆無である1月と7月に事例がみられることも、それを示唆している。八重山諸島では10月が多く、当域全体の過半数（28例中15例）を占めている。事例の無い月が、1, 3, 5, 6, 8, 9月と最多で、琉球諸島でもっとも特定の月への集中度が高い。同じ先島諸島でも、集中する月が宮古と八重山で異なり、その集中度も八重山の方が高いと言える。

(2) 年間実施回数

① 分類

年間実施回数が確認できた事例群を、回数毎に分類したのが表4である。事例群は大きく、年に1回（387例）、2回（61例）、3回（19例）、4回（1例）と、特定年数に1回（5例）の5つに分けることができる。

倒的に多いのが1回で、その合計は全体の約8割を占めている。各地での割合は、北部約9割（100例中87例）、中部約7割（137例中97例）、南部約8割（105例中89例）、周辺離島10割（11例中11例）、宮古約9割（93例中85例）、八重山約6割（28例中18例）と、琉球諸島全域において非常に多いことが分かった。

次に多いのが2回である（61例）。合計を占める割合は1割程度で、最多の年1回との差は大きい。その割合は各地でも、北部約1割、南部約1割、周辺離島0、宮古約1割と少ないが、沖縄本島中部と八重山諸島に比較的多く、中部では約3割（39例）、八重山では約4割（10例）を占めている。こ

表3 儀礼の期日一覧表(周辺離島〔沖縄本島〕)

集 落 名	期 日	儀礼名称
伊 江 村 川 平	4月頃	虫払い
伊平屋村田名	1月3日	アクゲーシ
渡嘉敷村渡嘉敷	3月吉日	シマクサラシ
渡嘉敷村安波連	3月吉日	シマクサラシ
座間味村座間味	9月下旬	シマクサラ
座間味村阿嘉	9月下旬	シマクサラサー
座間味村慶留間	11月頃	シマクサラサー
粟 国 村 東	12月8日	カンカー
粟 国 村 西	12月8日	カンカー

表4 シマクサラシ儀礼の年間実施回数表

	1回	2回	3回	4回	X年に1回
沖縄本島北部	87	8	2	0	2
沖縄本島中部	97	31	7	1	1
沖縄本島南部	89	10	4	0	2
周辺離島(沖縄諸島)	11	0	0	0	0
宮古諸島	85	4	4	0	0
八重山諸島	18	8	2	0	0
合 計	387	61	19	1	5

のことは、両地域で年1回の割合が低いことから分かる。とくに、中部は、年に複数回、儀礼を行う事例の多い地域となっている。中部の事例数が全体を占める割合は、2回は約5割、3回は約4割と突出し、年4回という1例のみの事例も中部であった（旧与那城町伊計〔琉球大学民俗研究クラブ1962:41,43-44〕）。

## ② 儀礼の間隔

年に複数回行われる事例が、どの程度の間隔を置いて行われるのかについて分析したい。そのために、年に複数回、儀礼を行う81例中、実施月が確認できた69例を儀礼間の月数ごとに整理したのが表5である。類例のないものをその他とした。周辺離島は、年に複数回行う事例がみられないため空欄となっている。

合計数が多いのは順に、4カ月と8カ月（22例）、6カ月と6カ月（13例）、2カ月と10カ月（6例）、3カ月と9カ月（6例）となる。

最多の類型が年に2回、4カ月と8カ月の間隔を空けて実施する例であった。具体例を挙げると、1月と9月、2月と10月、4月と8月、5月と9月など、実施月にバリエーションがみられるが、分布圏は琉球諸島全域と広い。諸島ごとに見た場合でも、最多または次位の類型となっている。

次に多いのが6カ月ごとに行われる事例（13例）である。八重山を除く、北部から宮古にみられ、事例数は北部と宮古では1例ずつだが、南部で最多、中部で2番目に多い類型である。具体的な実施月として、2月・8月（10例）、3月・9月（2例）、6月・12月（1例）がある。

年3回については19例と数が限られ、類型化できないほどのバリエーションがみられる。唯一、2カ月・6カ月・4カ月という間隔が比較的多く、中部に3例みられる。

八重山諸島の波照間島では、年に3回儀礼が実施されるが、干支を基準とし、毎年、実施月が異なるため、本項目での分析には含めなかった。ただ、これまでに確認できた波照間の4年分の儀礼の実施日を整理すると、2カ月・6カ月・4カ月という傾向がみられ、年3回の間隔として最多の類型と同じであった<sup>3</sup>。

表5 年間複数回事例における儀礼間の間隔（月数別）

	2 ・ 10	3 ・ 9	4 ・ 8	5 ・ 7	6 ・ 6	2 ・ 4 ・ 6	2 ・ 6 ・ 4	3 ・ 3 ・ 6	1 日	そ 他
沖縄本島北部	1	2	2	2	1					2
沖縄本島中部	4	4	11	2	8		3		1	3
沖縄本島南部	1		2	1	3		1	2	1	
周辺離島 (沖縄諸島)										
宮古諸島			2		1	2				2
八重山諸島			5							
合 計	6	6	22	5	13	2	4	2	2	7

3 注意点として、八重山諸島には、年に3回、儀礼を実施する例が2例ある。十干・十二支・干支の詳細な分析は別稿で扱うが、八重山では儀礼の実施日は、吉日や定日ではなく、干支を基準とする例が多い。その場合、某月の儀礼と意識されていても、年によって、1カ月前後することがある。そのような事例を、ある年の例をもって、例えば、2月、6月、10月として、表に加えることは、実態を捉えることにはつながらないと考えたので、儀礼間の間隔の分析では省いた。

年2回では4カ月と8カ月、年3回では2カ月・6カ月・4カ月という間隔を空けて儀礼が行われることが多いことが分かったが、表5のタイプのバリエーションはどのように把握することができるか。まず、1年を等分して、儀礼を実施しているか、という視点からみてみたい。等間隔に儀礼を実施しているのなら、年2回なら6カ月ごとに1回、3回なら4カ月ごとに1回ということになる。等間隔に儀礼を実施しているのは14例で、全体の約2割と少ない。内訳は、4カ月ごとに実施する例(1例)と6カ月ごとに実施する例(13例)である。4カ月ごとの年3回行う村落は1例しかみられず、表5のその他に含まれている。これらの背景には、1年を12カ月と把握し、4カ月や6カ月といった等間隔に、村落の安泰を願うといった意識があったのではないだろうか。しかし、それだけでは他の多くの等間隔ではない事例群を説明することができない。関連が予想される各地の生業や、季節に対する観念の分析を含めた考察を今後の課題としたい。

最後に、儀礼と儀礼との間隔が極端に短い事例に注目したい。表5の1日(2例)とその他に含まれる1カ月という事例(2例)である。1日違いで儀礼を行う村落について注意したいのは、同じ儀礼を2日間続けているのではなく、儀礼を1日違いで行っている点である。一定の間隔を空け、村落の防除儀礼を年に数回行う人々の気持ちは理解できるが、その間隔が極端に短い事例は何を意味し、どう理解すれば良いのだろうか。

結論から言うと、儀礼と儀礼の間隔が1カ月以下と極端に短い事例は、それらが同内容の別種の儀礼である可能性が考えられる。村落の防除のために動物を使う儀礼が複数種あった可能性については、既発表の論考[宮平 2013]でも述べたが、期日の分析でも同じような可能性が浮かび上がってきた。この問題については、本稿の趣旨と異なるため稿を改めて詳しく分析したい。

### (3) 複数年周期

月日は決まっているが、毎年ではなく、特定の年数を周期に実施する例がある。周期となる年数を表6に整理した。2年(宮里、今泊、安里)、3年(平敷屋)、6年(潮平)などの周期があり、当年を十二支として意識している村落もある。

すべて沖縄本島の事例で、北部2、中部1、南部2の計5例と少ない。北部は名護市宮里[聞]と今婦仁村今泊[沖縄県立芸術大学

表6 複数年周期分類表(年数別)

	周 期	6年に1回	2年に1回			3年に1回
		子・午	子・寅・申 寅・午・戌	丑・卯・酉 卯・未・亥	(十二支不明)	(十二支不明)
沖縄本島北部	2		1		1	
沖縄本島中部	1					1
沖縄本島南部	2	1		1		
周辺離島(沖縄諸島)	0					
宮古諸島	0					
八重山諸島	0					
合 計	5	1	1	1	1	1

附属研究所編 2006:12)、中部は旧勝連村平敷屋[聞)、南部は旧具志頭村安里[聞]と糸満市潮平[聞]



の事例である<sup>4</sup>。

#### (4) 臨時事例

実施する月や周期年数も不定で、疫病が当村落や他地域で流行した際に、臨時に実施されるシマクサラシ儀礼を臨時事例として扱いたい。臨時事例が行われたのは最近でも約70年前の話で、現在、儀礼を実見したことがある人は非常に少ない。

これまでの調査で37例の臨時事例が確認できた（文献15・聞き取り22）。定期的な事例（478例）に比べ、非常に少ない。37例を地域別に整理した表7から、沖縄本島北部（10例）、中部（9例）、周辺離島（15例）、八重山（3例）にみられ、沖縄本島南部と宮古諸島では未確認である。周辺離島（沖縄本島）に顕著で、その数は全体の約4割に相当する（37例中15例）。伊江島、粟国島、渡嘉敷島は定期事例であるものの、臨時事例の分布は、伊平屋島（4例）、伊是名島（5例）、渡名喜島（1例）、座間味島（1例）、久米島（4例）と広い。また、周辺離島で儀礼がみられるのが26村落と、6地域で最少であることを鑑みると、当地域の臨時事例の多さがさらに顕著となる。

ところで、臨時事例が行われる機会を整理すると、フーチ、ハナヒチ・パナシキ（感冒）、イリガサー（麻疹）、天然痘など表現は様々だが、37例すべてが流行病を意識して行われることが分かった。シマクサラシ儀礼の主な目的は、災厄の村落への侵入防止であるが、災厄の種類は流行病の他、火、害虫、悪霊など、多様である。このような中、臨時のシマクサラシ儀礼に意識される災厄はすべて流行病であった。

### 3 先行研究との比較及び検証

#### (1) 実施月・年間実施回数

これまで、シマクサラシ儀礼の実施月は、主に2月に行われ、その他の月もあるとされることが多かった [島袋 1941；比嘉 1959；真栄田編 1972；宮平1983]。

しかし、2-(1)での実施月の分析によって、「主に2月」や「その他の月にもある」と概括することはできない豊富なバリエーションと、大きな地域性があることが明らかになった。主に2月に行われるのは沖縄本島中南部の特徴で、それでも事例数がほぼ同じである8月を欠いた説明となる。主に2月に行われるという説明に、沖縄本島北部、周辺離島、宮古諸島、八重山諸島は含まれていない。中南部の特徴の一部をもって、沖縄におけるシマクサラシ儀礼の実施月とは言えない。本儀礼の実施

表7 臨時事例一覧表

	事例数
沖縄本島北部	10
沖縄本島中部	9
沖縄本島南部	0
周辺離島 (沖縄諸島)	15
宮古諸島	0
八重山諸島	3
合計	37

4 聞き取り調査によるデータには [聞] と付し、本稿の末尾に、調査年、話者の頭文字、年齢、性別などを記した [凡例：M (80代男性)、T (80代女性) → M (8M)、T (8W)]。

月を言及する際には、具体的な地域性を示す必要がある。

年間実施回数については、儀礼を概説する資料の示す通り1回が最も多く、それは琉球諸島全域において言えることが分かった。

## (2) 偶数月と奇数月

小野重朗は、シマクサラシ儀礼の実施月と年間実施回数の意味を考察した。沖縄のシマクサラシ儀礼の実施月は偶数月に多く、それは、60日ごとの年6回の行事であったものが2カ月毎の行事となって偶数月となり、さらに4月や6月などの農作業の多忙な月が略されて成立したという〔小野1979:16〕。

小野の仮説の検証のために、悉皆調査により確認できた儀礼の実施月を偶数月と奇数月に分けたのが表8である。括弧内に当域の全数を占める割合、合計の括弧は総数を占める割合となっている。

合計から、全体の約7割強が偶数月に行われていることが分かる。周辺離島はもともと事例数が限られているため、奇数月に多いとは一概には言えないが、地域別にみても、ほとんどの地域が偶数月の割合が7～9割を占めている。ただ、北部では奇数月の方が多く、偶数月との割合も他地域ほどの大差はない。とくに、大宜味村、本部町、宜野座村、恩納村では奇数月に行う村落が過半数を超える。

小野の指摘通り、儀礼が行われる月は琉球諸島のほぼ全域で、偶数月が多いことがわかった。しかし、北部のように両者が拮抗している地域もあることや、全体の2割と限られているが、奇数月の事例も看過できないであろう。

そして、小野は奄美の防災儀礼であるカネサルを例に挙げ、10月の庚申に行われることと、沖縄のシマクサラシ儀礼が偶数月に多いことを関連付けたが、そもそも特定の干支が偶数月に来るとは限らない。干支は十干と十二支の組み合わせで60種類あり、特定の干支は60日（約2カ月）に1回、1年に6回ほど巡ってくる。だが、小野の挙げた10月の庚申を例に、ここ50年間で調べても、庚申が10月に当たるのは全体の半数ほどで、残りは奇数月の9月や11月となっている。つまり、庚申を含めた特定の干支が偶数月に当たるとは限らないのである。偶数月に儀礼が多い理由に干支との関連性があるとは現時点では考えにくい。しかし、干支の周期に合わせてシマクサラシ儀礼が実施されていた可能性を否定することはできない。今後、偶数月と干支の関連性を慎重に考察する必要がある。

あと、4月や6月などの農繁期が略されたという仮説の検証には、琉球諸島各地の生業のバリエーションを念頭に、ミクロとマクロの両方の視点からの分析が必要であり、紙数の都合上、本稿では言

表8 偶数月・奇数月別一覧表

	偶数月	奇数月
沖縄本島北部	63 (58%)	46 (42%)
沖縄本島中部	164 (91%)	17 (9%)
沖縄本島南部	91 (80%)	23 (20%)
周辺離島 (沖縄諸島)	3 (33%)	6 (67%)
宮古諸島	69 (73%)	26 (27%)
八重山諸島	22 (85%)	4 (15%)
合計	412 (77%)	122 (23%)

及できなかった。本儀礼の実施月のバリエーションの意味として、推測される可能性としては、小野の指摘通り、農繁期の前後に実施されたという農業との関連性、あるいは、疫病の流行しやすい時期という季節に対する観念を反映したものである可能性などがあると思う。しかし、一年のすべての月に儀礼がみられ、地域性が大きいことは、その論理が一つではないことを示していると考えられる。今回の分析結果を踏まえた考察を、今後の重要な課題としたい。

### (3) 干支の定期化

古くは、シマクサラシ儀礼は、庚申といった特定の干支が巡ってくる60日に1回、つまり1年に6回の偶数月に実施されていたものが略化縮小していった、という小野重朗の仮説を検証したい〔小野1979:16〕。

小野の仮説に立つと、年複数回の儀礼間の間隔は、少なくとも2カ月（60日）から、長くて10カ月（300日）の間隔となる（2, 4, 6, 8, 10カ月）。

2-(2)-②での儀礼間の間隔の分析で作成した表5をみると、年2回の間隔は奇数・奇数（3カ月・9カ月、5カ月・7カ月など）、または偶数・偶数（4カ月・8カ月、6カ月・6カ月など）の2通りになる。分類すると、年2回の52例中、前者は11（奇数・奇数）、後者は41（偶数・偶数）と、偶数月の間隔が全体の約8割が占める。年3回の間隔パターンは、奇数・奇数・偶数、偶数・偶数・偶数の2通りとなる。前者6例、後者8例とわずかに偶数・偶数・偶数が多い。

総じて、間隔としては偶数の月数が多いことが分かった。ある特定の干支が巡ってくる2カ月（60日）に1回ごとに、儀礼が実施されていたという小野の仮説の証左となり得る結果となった。さらなる詳細な検証のために必要とされる、間隔が奇数月である事例や、実際に干支を基準とする事例の分析は、今後の課題としたい。

### (4) 臨時事例の分布形態と災厄

小野重朗は、臨時の防災儀礼に意識される災厄は病気などの具体的な災厄であるとした〔小野1979:24-25〕。2-(4)での分析で、小野の指摘通り、臨時のシマクサラシ儀礼に意識されるのは流行病のみであることが分かった。

また、全国の臨時の防災儀礼が本州にみられず、沖縄、奄美、南九州に多いという分布形態は、民俗圏論の視点から見ると、周縁に古い形が残った結果であり、定期より臨時の防災儀礼が古いことを示していると考えられるとした〔小野1979:23〕。

今回の分析で、シマクサラシ儀礼の臨時事例は周辺離島に顕著であることが分かった。これは、小野が全国レベルで指摘した臨時の防災儀礼の分布形態の縮図が、沖縄のシマクサラシ儀礼においても見られると言えるのではないだろうか。ただし、中央から遠い周縁に臨時が残るのなら、先島諸島にも多いことになると思うが、宮古諸島に皆無で、八重山諸島にもそれほど多くない意味も、今後解明

すべき点である。

## 総括と課題

広義の《シマクサラン儀礼》の期日に焦点をあて、その実態の解明を目指し、2002～13年までの悉皆調査により確認できた事例群を、実施月、年間実施回数、複数年周期、臨時事例という項目ごとに分析を行った。そして、その結果を踏まえ、先行研究との比較や検証を試みてきた。要点と課題を整理したい。

実施月：一年のすべての月にみられるという豊富なバリエーションと、地域性が顕著であることが明らかになった。先行研究で示したような、主に2月、あるいは2, 8, 12月に多いという説明は、琉球諸島全域でなく、沖縄本島中南部の特徴の一部を捉えたものである。本儀礼の実施月を言及する際には、具体的な地域性を示す必要があることが分かった。

干支の定期化：小野重朗の指摘通り、偶数月に儀礼が多かったが、現時点では、その理由に干支との関連性があるとは考えにくい [小野 1979:15]。今後、間隔が奇数月である事例や、実際に干支を基準とする事例の分析が、小野の提示した仮説の検証に必要である。

臨時事例の分布形態と災厄：臨時事例は37例と非常に少なく、全体の1割に満たない。その分布は沖縄本島の周辺離島に顕著であることが分かった。小野が全国レベルで指摘した、臨時の防災儀礼が周縁に残るという分布形態の縮図と換言できるのではないだろうか [小野 1979:23]。そして、その分布形態は、小野の提示した防災儀礼の臨時からの定期化説の傍証になるとも考えられる。その検証のために必要と思われる定期事例との比較や、臨時事例のさらなる分析を今後の課題としたい。

臨時事例に意識される災厄は、小野重朗の指摘通り、すべて疫病そのもので、それ以外の災厄はみられないことが分かった。この結果をもとに、災厄神の新旧や変遷の問題を考察したいと思う。

重要な課題として挙げられる、「実施月や年間実施回数と農耕サイクル及び年中行事との関係」、「儀礼間の間隔と干支の関係性」、「災厄神の新旧や変遷の問題」については、今回の分析結果を踏まえ、多角的な分析及び考察を試み、その解明を目指していきたい。

## 聞き取り調査

名護市宮里。2003,8,12年調査。K (6M)、O (6W)、H (5W)、M (5M)、K (9M)。

旧勝連町平敷屋。2003,8,12年調査。N (6M)、T (6M)、4W。

旧具志頭村安里。2003,5,7,8,9年調査。T (9W)、T (6M)、S (9M)、M (9M)、6M、5M、G (6M)、K (6M)。

糸満市潮平。2003,8年調査。K (5W)、K (7M)、8W、7M、7W、6M。

調査にあたり多くの方々に御教示を賜りました。心から敬意と感謝を表したいと思います。ありがとうございます。

## 参考文献

- 大城學（2003）『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』、砂子屋書房
- 小野重朗（1970）「肉と餅との連続－供犠儀礼について－」日本民俗学会編『日本民俗学』第71号、pp.29-41、日本民俗学会
- 小野重朗（1979）「コトとその周囲」日本民俗学会編『日本民俗学』第120号、pp.1-27、日本民俗学会
- 小野重朗（1982）『奄美民俗文化の研究』、法政大学出版局
- 島袋全發（1941）「琉球の年中行事」式場隆三郎編『琉球の文化』、pp.183-212、昭和書房
- 田代安定（1945）『沖縄結縄考』、至言社
- 萩原左人（2009）「肉食の民俗誌」古家信平・小熊誠・萩原左人著『日本の民俗12 南島の暮らし』吉川弘文館
- 萩原左人（2013）「宮古島友利のスマフサラ儀礼」『沖縄民俗研究』31 沖縄民俗学会
- 比嘉春潮（1959）「沖縄 年中行事」大間知篤三〔他〕編『日本民俗学大系』第12巻、pp.127-148、平凡社
- 真栄田義見、三隅治雄、源武雄編（1972）「シマクサラシ」『沖縄文化史辞典』、pp.178-179、東京堂出版
- 宮平実「シマクサラシ」沖縄大百科事典刊行事務局編（1983）『沖縄大百科事典』中巻、p.327、沖縄タイムス社
- 宮平盛晃（2012a）「除厄儀礼としてのシマクサラシ」原田信男・前城直子・宮平盛晃共著『捧げられる生命－沖縄の動物供犠－』pp.21-58、お茶の水書房
- 宮平盛晃（2012b）「シマクサラシの分布と現況」原田信男・前城直子・宮平盛晃共著『捧げられる生命－沖縄の動物供犠－』pp.59-95、お茶の水書房
- 宮平盛晃（2013）「琉球諸島における動物・防除儀礼《シマクサラシ儀礼》の名称に関する研究－悉皆調査による新たな展開と問題－」日本民俗学会編『日本民俗学』276号、pp.31-51、日本民俗学会
- 八木康幸「道切り」福田アジオ〔他〕編（1999）『日本民俗大辞典』下巻、pp.610-611、吉川弘文館
- 山下欣一（1969）「南島における動物供犠」南島研究会編『南島研究』第10号、pp.67-74、南島研究会
- 山下欣一（1998）『南島説話生成の研究－ユタ・英雄・祭儀－』、第一書房
- W.P.リーブラ著、崎原貢・崎原正子訳（1974）『沖縄の宗教と社会構造』、弘文堂
- 沖縄県立芸術大学附属研究所編（2006）『鎌倉芳太郎資料編（ノート篇）』第2巻（民俗・宗教）、沖縄県立芸術大学附属研究所
- 琉球大学民俗研究クラブ（1962）『沖縄民俗』第5号、琉球大学民俗研究クラブ

# Study on the Date of “Shimakusarashi Ritual” in the Ryukyu Islands

## Focus on Analysis of Cases and Comparative Verification with Previous Researches

Moriaki MIYAHIRA

### Abstract

This study is focusing on the performance date of “Shimakusarashi ritual” in the Ryukyu Islands. The complete enumeration had been done for this ritual from 2002 to 2013. The case groups were divided into these four groups : the month, the number of times in one year, the cycle of the multi-year period and the temporary cases. These groups were compared and inspected with the previous researches.

The results of the analysis, each group shows that there are rich in variations and notable regional differences in the dates of performances. Although previous studies explain that this ritual mainly have been conducted in either February or August or December, they are not occurring in whole Ryukyu Islands but in the middle south part of the Ryukyu main island. Therefore, it is necessary to indicate the specific regions when it would be mentioned the implemented month of Shimakusarashi ritual.

Additionally, it is revealed that the distribution map of Temporary rituals in Amami islands and Ryukyu islands is an epitome map of nationwide Japan’s map of it. In the cases of temporary rituals for disaster prevention are especially prominent on the remote islands of Ryukyu’s. Juro Ono pointed the temporary “Shimakusarashi ritual” have not to be conducted throughout Japan, but only been seen in Amami islands and Ryukyu islands as a result that it is remained as an ancient ritual in the periphery islands [Ono 1979 23].